

# 第1次昭和切手「御朱印船」

伊藤 純英

## 【解説】

作品には、シート4枚を展示しているが、一瞥して「意味のないシートの羅列」としてしか見るか、製造面をよくあらわしたものと見て見るか、この二つの見方は昭和切手をどんな切手として考えるかという根本問題に関わる。

版式は凸版1色刷。発行当初平面版。14年のコイル切手製造にあわせて輪転版の切手が製造された。印刷実用版の分類をすれば、平面版は1版、輪転版は0号機（下部枠線5-5）、2号機（下部枠線2-3-5）、3号機（下部枠線3-2-5）の3版それぞれに奇分割・偶分割の2種類があるので6版。計7版で蒐集上はコンプリートとなる。それぞれに初期印刷〜後期印刷がある。

ちなみに0号機というのは便宜上私が名付けたもので、左側枠線に切れがないものを指す。昭和初年にドイツのゲーベル社から2台の凸版輪転機が輸入された。日本では全く同じ機械を2台国産化し、計4台体制で輪転版切手の印刷を行った。この4台の機械を区別する必要がないときには下部枠線に特に印をつけなかったのが「5-5」の枠線の切れのままである。これを便宜上0号機としたのは、「左側枠線の切れがない」=0というのに対応させたからである。1号機は（1-4-5）、2号機は（2-3-5）、3号機は（3-2-5）、4号機は（1-4-5）という枠線の切れによって分類してある。この額面にはないが、1次4銭など右枠線に切れがある場合があり、その際は右側を（4-1）のように区切った表記にする。

この作品の展示では、1段目に平面版のシートと定常変種を展示した。印刷時期によって、特定の定常変種がある場合とない場合がある。

2段目には輪転版6種の実用版のうち定常変種を多く含む順に3版展示した。おおまかな印刷時期の順に展示してあるので、機械の順番にはなっていない。これもある特定の時期の定常変種があると思われるので、この展示をご覧になった後ぜひ同じものを探してほしいものである。昨年14銭コイルの細字変種を展示した後、さっそくヤブオクに出品された。慧眼の士もいるものだと言った。尤も私も2点目を入手したのであるが。

この5厘切手は、印面にベタ刷りの部分が多く、文字も「大日本帝国郵便」の7文字と「五厘」「1/2」の5文字と菊花紋章と白抜き部分も多い。この白抜き部分の面積が広がってれば定常変種の可能性が高い。逆の場合、白抜き部分が埋もれている場合は、インクの詰まり具合の可能性もあるので定常変種の可能性は低くなる。1937年発行当時需要の多い2銭切手と4銭切手の後に発行されたが、この両額面に比べ、発行数は少ない。その割りに現存シートが

多いので、版を調べるのに都合がいい。

この作品はJAPEXの特集に協賛しての作成（副実行委員長再三の依頼）なので、審査してもらうつもりではなかったのだが、事務局の話によると自動的に競争出品になるということだった。直近の国際切手展「BUNGDON2017」で88点作品の5厘関係4リーフを含んでワンフレームに発展させたものである。昨年同様、例によって「抜き出し作品」とみなされて、ワンフレームの展示にふさわしくないと80点つけられるのであろうか。今年のJAPEX特別規則では、このタイトルが例示されているので問題はないのであろうか。（今回80点にも遠く及ばない、74点の大銀賞だった。）

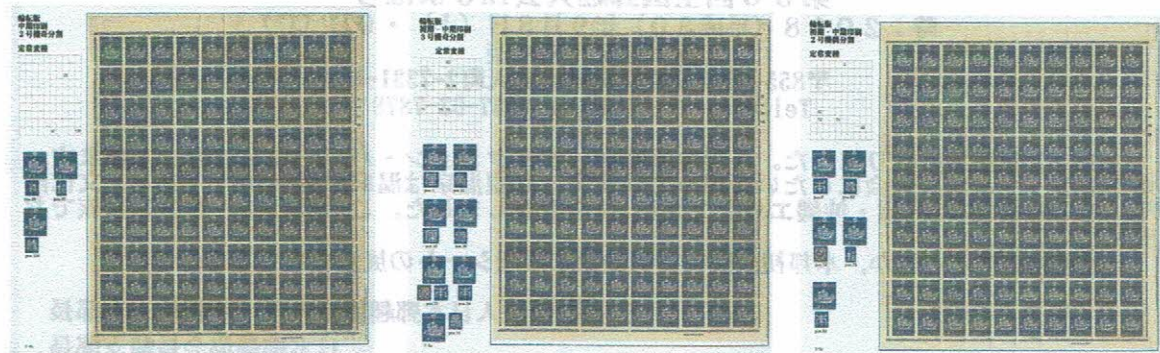
\*\*\*\*\*

昨年「出さなきゃよかった」と後悔した嫌な気分を再び味わいたくないものである。「長崎の外国郵便」は昨年JAPEX出品直前のTHAILAND2016では88点。今回直近の国際切手展も「大金銀賞88点+特別賞」。その受賞作品8フレームに昨年つけられた点は80点。88→80→88とジェットコースター並みの採点。同じくTHAILAND2016で88点、直近のBUNGDON2017でも「大金銀賞88点」昭和切手作品8フレームからの、コイル切手の目玉をこれでもかと詰め込んだワンフレーム作品に80点。「ほんとうに国際展準拠の展覧会？」との疑念を抱かせるような審査はしてもらいたくないものである。昨年少々煽りすぎたのだが、逆上ない。個人的にはどんなに気に入らない人物でも、作品は作品。客観的な基準でしっかりやってもらいたい。恣意的運用は権威を傷つけるだけである。国際展8フレーム作品に80点をつけて何とも思わない感覚は、国際展で84点と85点の違いの重みを肌で感じたことがないと思わざるをえない。80点という点は、「長崎の外国郵便」を5フレームでPHILANIPPON2001に初出品したときにもつけられなかった過去最低の点数である。このときと昨年時点・現在では雲泥の差がある。16年の歳月で進歩しないどころか、退歩する一方だったのだろうか。国際展8フレーム作品で85点未満をつけられたのはJAPEXだけである。審査員との対話でも「昭和コイル」ではべた褒めなのに80点。「長崎の外国郵便」は、悪い点のみ強調、見るべきものは何もない最低な作品だそうである。それで80点。気分が悪くなるだけなので、今回この作品については、審査員との対話は申し込まなかった。益なしてである。もう1点出品の「長崎郵趣」は申し込んだ。

※審査講評では昨年取ったばかりの全日本郵趣連合の鑑定書は信用できないので（JPSで？）取り直すようにとの指導。5厘コイル単貼カバーはJPSの鑑定書が必須となつたらしい。

\*\*\*\*\*

（※招待出品だと思っていたらそうじゃなかった。出さなきゃよかった。）





平面版 定常変種

最初期印刷



pos.83



pos.83 late type



pos.96

初期～中期印刷シート →



pos.86

pos.51

pos.83

pos.96



平面版の切手にはいくつかの定常変種が知られている。上に展示したブロックは最初期印刷だが、83番位置に「辰」字太りの変種が見られる。このブロックには96番の変種は含まれていない。この83番変種は最初の印刷から取り換えられることなく存在し続け、後期の印刷では、さらに最終面の線種が短くなったものも知られている。下図は右の100面シートに含まれる変種を示した。  
2.6番:「辰」左下欠け、5.1番:「命」字7画短め、8.3番:「辰」字太り、9.9番:4画短め。

3-4



今回、上のダブルリーフ (A4×2=A3) のほか、国際展で新しく認められた幅30cmのリーフでシートを展示してみた。JAPEXのパネルでは重なって展示されていたので、JAPEXでは2.8cmがいいかもしれない。

【表紙の説明】 2017年最大の収穫。未使用大ロットの中から取り出したときは6・4の状態で折れ曲がっていて、「なんか状態のよくない7銭東郷だなあ」と思っていたら東郷でなく、乃木図案！そしてよく見たら耳紙に目打ちが貫通！びっくり仰天！夢か！蛍光灯でなく自然光のもとでも間違いなく朱！以来ひそかに隠し持っていたが全日本切手展2017に郵政博物館所蔵のシートが展示されるというので、持参し比べてもまごうかたなき朱単線12。朱単線12と朱赤単線12は版が違うので銘版を見れば鑑定云々でなく一発で判別できる。鳴美『昭和切手専門型録』の該当部分を参照のこと。バンドン展に展示してあった他作品の8枚ブロックは上のものと銘版が異なって少し暗い朱色。ということで、最新情報を取り入れた現時点での

『朱色単線12目打銘版』

は、上のものと兎玉コレクションの3枚ストリップのみの2点の確認となる(郵政博物館所蔵は除く)。本品は銘版以外にも朱単線12の現時点での最大ブロック(郵政博物館所蔵は除く)の可能性が高い。朱単線12は単片がほとんど田型も数点(文献上でもJAPEX2012記念誌にわずか2点のみの掲載)しかなく、ましてやそれ以上のブロックの確認は初めてではないかと思われる。十年ほど前に『郵趣』誌上で大々的に販売されたシートは、当時から「色が暗いのでは」と言われ続けてきたが、最新の研究(銘版の特徴)から残念ながら朱単線12ではなかった。朱単線12銘版つきをひそかに隠し持っている人もいるかもしれないが、鳴美『昭和切手専門型録』の該当部分を参照・再確認して、できれば発表してほしい。

『朱色ではないかなと迷うのは全て朱赤、朱色は迷いなく朱色』と断言してもいい。